

**理科室が新しくなりました**

「理科室がきれいになっている。」

「本当だ。早く使いたいな。」

管理棟(南館)にある放送室前の廊下から、北側に位置する理科室を見ながら、6年生の子どもたちが話しています。理科室では工事関係者が(周りを保護するために貼り付けた)養生用のビニールを取り外しています。

「そうだよ。北小は良い子が多く、みんな何事にも一生懸命頑張るから理科室を新しくしてくれたんだよ。10月頃から使えるようになるからね。」

と話すよ、

「やった。」

と嬉しそうな子どもたちの歓声です。

夏休み中に始まった理科室の改修工事も終わり、いよいよ使えるようになります。これまで本校では、理科室について次のような要望をしてきました。

- 理科実験で使うガスバーナーの設置(ガス配管の設置)
- それに伴い実験台(理科テーブル)を新しく
- 水道の給排水の改修(排水の流れが悪く詰まりやすい)
- 色々な理科実験に対応できるように電気容量を大きく

これらの工事をするためには、床のコンクリートをはがし、床下に水道管、排水管、ガス管を設置しなくてはなりません。ですからテーブルを新しくするだけでは出来ないことです。そのため大規模な改修工事になります。大きな費用がかかるためなかなか出来ませんでした。そして今年、遂に素晴らしい理科室に生まれ変わったのです。ただ、床面はきれいになりましたが、側面(壁)はそのままです。工事請負業者さんからも、(親切心から)

「せっかく床面がきれいになったので、壁面も一緒にどうですか。費用的にも、続きの工事なので割安になりますよ。」

と話がありました。学校からも市教委にお願いしたり、業者さんにも見積書を持って委員会に行っていただきました。期待していたのですが、残念ながら厳しい財政事情もあり、側面の塗装は出来ませんでした。

でも、市当局、市教委のご高配で素晴らしい理科室、使い勝手の良い理科室になりました。本当に嬉しいことです。北小のホームページにも詳しい内容が掲載されていますので関心のある方はご覧下さい。



## イチロー選手の快挙に拍手

アメリカ大リーグ、シアトルマリナーズで活躍するイチロー選手が長い大リーグの歴史の中でも実に108年ぶりという快挙を成し遂げました。新聞やテレビでも大きく報道(9月15日の山日新聞)されていたので皆さんもご存知かと思えます。その記録というのは9年連続200本安打です。この記録は実に百年以上前にウイリー・キラー選手が1894年から1901年までの8年間、連続して200本安打して作ったものです。その記録にイチロー選手が昨年並び、今年、遂にこの記録を破り新記録を達成したのです。同じ日本人として嬉しく誇らしい気持ちで一杯です。

イチロー選手の活躍はアメリカ人の日本人観を大きく変えた(良い方向に)そうです。これまでの日本人に対する印象はエコノミックアニマルといわれた時代のイメージが強く、金銭にどん欲で自分の利益のためには平気でモラルを踏みじり、また自分の利益にならないことはしない、というイメージがあったそうです。それがイチロー選手の活躍や映画の「ラスト・サムライ」などの影響で、勇気があり、忍耐強く、義侠心に富み、倫理を重んずるという理想的な人間像としてイメージされ始めたそうです。日本人として個人的にはうれしい気持ちですが、日本人の中にもとんでもない奴がいることを思うと、なんとなく気恥ずかしいような気持ちにもなります。

さて、イチロー選手は野球技術が素晴らしいだけでなく人間的にも魅力溢れる人物です。新聞、雑誌、テレビ等で見たり聞いたりした彼の人物を偲ばせるエピソードを紹介します。高校時代に周りの友だちから、

「10年後にクラス会で会おう。」

と言われたとき、

「ぼくは、10年後にはアメリカの大リーグで野球選手として活躍しているのでクラス会には参加出来ないよ。」

と言い、クラスメイトから爆笑をかったそうです。

また、テレビのインタビューで次のようなことを言っています。(以下、イチロー選手のことばかり引用します)

小さい子が、「将来、プロ野球の選手になりたい」と、夢を語ったならば、多くの大人は次のように言うでしょう。「プロ野球の選手なんていうものは、本当に選ばれた一握りの人が成れるのであって、普通の人々が野球が少しばかり上手だからといって成れるものではない。また、努力の末、プロ野球の選手に成れたとしても、ほとんどの選手は二軍生活で終わり、一軍で活躍出来るのは数えるほどだ。だからプロ野球の選手になろう、なんてことは考えない方がよい。」

ぼくも多くの方からそのように言われてきました。でも、今、ぼくに向かって誰もそのようなことは言わないでしょう。人間には限りない可能性があるのです。小さい頃からその夢を潰すようなことは言わないでもらいたいですね。(ここまでが引用)

現にイチロー選手は入団の時は、体格にも恵まれず細身の体でプロとしてやっていけるか危ぶまれていました。ドラフト順は4位ということですからそれほど注目を浴びた選手ではなく、現に始めの1年目は二軍生活でした。

ところが、仰木(おうぎ)監督に出会い、その才能を見いだされ、イチローとカタカナ名でデビューするや大活躍するようになりました。隠れていた才能が一気に開花したのです。まさに、イチロー選手が言うように「どの子にも限りない可能性がある」そのことをイチロー選手は自分自身の生き方で示しました。

イチロー選手の野球人としての生き方について見てきました。野球に限らずどんな道に進むのであれ、子どもが目を輝かせ夢を語ったならば、私たち大人は、心ないことばで子どもの夢や可能性を潰(つぶ)すことがないよう気をつけたいものです。